

「家族」がいる幸せ

西中学校二年 久保田 莉 奈

私には、大切な家族がいる。父、母、弟、私の四大家族だ。とても仲が良く、週末は家族で出かけたり楽しく過ごしている。私は家族と過ごす時間が大好きだ。

しかし、家族のだけれども予想もしていない出来事が起こった。それは、母の入院だ。一ヶ月前くらいから体調が悪いと言っていて、一週間前からは、私が学校から帰ってくると、ぐったりと横になっていることが多くなり、とても心配で仕方がなかった。父から入院したと聞いた時は、不安な気持ちとさみしさと悲しさで胸がいっぱいになった。

それから、母が家にいない生活が始まった。いつも笑顔で私に接してくれる父、元気いっぱいな弟もいつもとちがいきさみしそうだった。

その日の夜、私は父と夕食作りをした。母がいない今、何か私にできることはないかと考えた。今までは、母の手伝いをする時、頼まれたことを中心にしていたので、母がいない夕食作りは手間がかかった。

母のいない朝は、想像以上に大変だった。弟の体温を測ったり、家族の水筒を準備したり時間があつという間にすぎていった。

その日の夕方、祖父と祖母が車で二時間かけて来てくれた。祖母

の料理はとてもおいしくて、父も弟もうれしそうに「おいしい」と食べる姿を見て、私もうれしくなった。祖母のおいしい食事に元気をもらった。食事の後片づけと食器洗いは私が自分から進んでやった。夕食を作っている祖母の姿を見ながら、同じことをするにしても、言われてからやるより、自分から進んで手伝う方が気持ちがいいのだと実感した。

母のいない間、洗たく物を取りこんだり、夕食作りの手伝いをしたり明日の準備やそうじなど、私もできる限りの家事をした。習いごとの送り迎えなどは父が早く帰宅してやってくれた。今まで全部、母が一人でやっていたかと思うと、毎日の大変さが身にしみて感じた。

母の手術当日。コロナ禍で母の病室に行くことができなかった。心配で母にテレビ電話をした。母は、不安そうな私に明るく接してくれた。「すぐ終わるから、元気になれるから。」母の声を聞いて私は少し安心した。夕方、病院にいた父から「手術が無事終わったよ。」と電話がきた。母はまだ麻酔で寝ていたので、今日はテレビ電話できない。母の声は聞けなかったけどほっとしたという安心感と同時に、体の力が抜けた。手術をしてくれた医師、お世話になった看護師さん、手術を乗り越えてくれた母、支えてくれた父、励ましてくれた弟、祖父、祖母、全ての人に精一杯ありがとうを言いたい。母もきっと同じ気持ちだったと思う。

久しぶりの家族四人そろっての食事。母が笑顔でキッチンに立っている。いつもの光景。日常の何気ない会話が心地良い。母のあた

たかい具だくさんのみそ汁。私の大好きなものが食卓に並んでいる。

家に帰れば母の作ったおいしい料理がある。学校に行けば、友達と楽しかったこと、嬉しかったことなど話ができる。そして、楽しいと感じるたびに笑顔がこぼれる。それが当たり前だと思っていた。人は健康でいられなくなるだけで、幸せと感ずることも、できなくなってしまう。今こうして家族と一緒に生活できること、これがどんなに素晴らしいか、幸せなことなのかを実感した。

母が退院して、しばらくしてから一緒に買い物に行った。私は、母と会話をしながら買い物を楽しんだ。母のいるふつうの生活がどんなにありがたいかを感じた。

これから私も自分のできることを見つけて、母を助けて少しでも家族の役に立てるように自分から進んで何でもやりたい。大切な家族の笑顔が見たいから。この幸せが永遠に続きますように。